

注

- i) I. P. Sheldon-Williams & Ludwig Bieler (eds. & trans.), *Iohannis Scotti Eriugenae Periphyseon (De diuisione naturae)*, i-iii, SLH 7, 9, 11 (Dublin, 1968-81). Édouard Jauneau (ed.), J. J. O'Meara & I. P. Sheldon-Williams (trans.), *Iohannis Scotti Eriugenae Periphyseon (De diuisions naturae) liber quartus*, SLH 13 (Dublin, 1995).
- ii) Édouard Jauneau (ed.), *Iohannis Scotti seu Eriugenae Periphyseon*, 5 vols., CCCM 161-5 (Turnhout, 1996-2003).
- iii) Ludwig Traube 1861-1907. ドイツで最初の Mittellatein の講座をつくった。Göttingen 大学の Wilhelm Meyer と並んで中世ラテン語文献学の樹立者の一人。 *Monumenta Germaniae Historica* の編集主幹も務めた。
- iv) Edward K. Rand 1871-1945. 米国人。ハーバード大学卒業後、ミュンヘンのトラウベのもとでポエティウスを研究。のちハーバードに戻る。The Medieval Academy of America 初代会長、雑誌 *Speculum* の初代編集者。
- v) E. K. Rand, *Johannes Scottus*. i. Der Kommentar des Johannes Scottus zu den *Opuscula sacra* des Boethius. ii. Der Kommentar des Remigius von Auxerre zu den *Opuscula sacra* des Boethius, *Quellen und Untersuchungen zur lateinischen Philologie des Mittelalters*, Vol. I. 2, München 1906, p. ix.
- vi) E. K. Rand, "The Supposed Autographa of John the Scot," in *University of California Publications in Classical Philology* 5, 1918-1923, no. 8, p. 140.
- vii) *Ibid.*, p. 140.
- viii) *Periphyseon*, ed. I. P. Sheldon-Williams, I, pp. 7-8.
- ix) Bernhard Bischoff, 1906-1991. Paul Lehmann に嗣いで 1953 から 1974 までミュンヘン大学の Lateinische Philologie des Mittelalters の教授。1953 年に *Monumenta Germaniae Historica (MGH)* の Zentralkommission に就任。
- x) T. A. M. Bishop, "Autographa of John the Scot," in *Jean Scot Érigène et l'histoire de la philosophie*, Paris 1977, p. 91.
- xi) *Ibid.*, p. 93.
- xii) *Ibid.*, p. 93.

司 会

中 川 純 男

E. ジョノーは *Corpus Christianorum* におさめられたエリウゲナ『ペリピュセオン』の校訂者であり、同叢書の補遺ともいえる *The Autograph of Eriugena* の執筆者

でもある。この書はエリウゲナの自筆写本をめぐって展開された、ほぼ一世紀にわたる論争の現時点における到達点を示しているとともに、同氏の校訂の補足説明ともなっている。今氏の報告は、この一世紀におよぶ錯綜した論争の経緯と問題を整理し、われわれに提示してくれた。現存する写本がエリウゲナの真筆であるか否かを決める手がかりは、当該の写本が九世紀のものであることをのぞけば、残された写本の緻密な観察と蓋然的な推論の積み重ね以外にはない。今氏の報告は、その要点を手際よく整理したものであるとともに、今後の問題を照射するものともなった。会場からも重要な問題提起がなされた。エリウゲナではないと判定された筆写者の加筆や訂正はどのような意味をもつのか、またエリウゲナ自身の加筆訂正はなぜなされたのか、あらたに校訂されたテキストは従来のエリウゲナ理解に変更を余儀なくさせるものなのか、興味は尽きない。写本研究から得られた知見が、思想解釈にどのような影響を及ぼすか及ぼさないかは今後解明されるべき重要な課題である。思想解釈にかかわる問題については、残されたテキストの「全体」と照合しつつ、新たな説明が醸成されてゆくであろう。思想解釈は個々のテキストの読みに依存するというよりむしろ、残されたテキストの理念的な「全体」にかかわる。この意味で思想解釈は、個々のテキストの異同からはある程度の中立を保っていると考えられるからである。エリウゲナ研究のいっそうの発展を待ち望む。

特定質問

小 浜 善 信

エリウゲナの自筆写本をめぐって、我が国を代表するエリウゲナ研究者である今義博氏によってなされた今回のご報告は、古文書学という学問の魅力と、あたかも謎解きに挑むかのように古文書の真相に迫ろうとする学者たちのたゆまぬ探究精神とを、簡潔に且つ迫真に満ちた仕方でも伝えてくださるものであった。テキストに基づくわれわれの哲学・神学研究が、少なからず古文書学者たちのそうした地道な努力に支えられていることも改めて実感された。

さて、20世紀初頭、ドイツの古文書学者L.トラウベによって提起された「エリウゲナの自筆写本」問題は、かれの弟子E.ランドに引き継がれ、さらにB.ビショップ